

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 689 号] 2019 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 689

November 2019

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 宮田光雄著『ボンヘッファー 反ナチ抵抗者の生涯と思想』を読んで 時代と向き合うとはどういうことか

大野 博人 (団友・後援会員、新聞記者)

自分が生きている時代と社会が非人道性を帯びていくとき、人はどう考え、どう行動するべきか——。本書はそう問いかける。

ドイツの神学者、ディートリヒ・ボンヘッファーは、牧師という使命を持つ身でありながらヒトラー暗殺計画に加わる。捕らえられ、計画も挫折し、ドイツの敗戦直前に処刑された。39 歳だった。

本書では、すぐれた神学者の彼がとった行動と、それを支え、またそれによって紡がれた思想が、残された著書や書簡などから描かれる。神学的な議論の紹介や読み解きは本書の骨格をなしているが、宗教とは日ごろ縁遠い世俗に生きるわれわれにも自省を迫る。

個人の思想や良心と、その時代や社会との相克に向き合わなければならないのは、ナチ時代のドイツの宗教者に限らないからだ。いつの時代の知識人や言論人、官僚、政治家にも逃げられない試練だ。

＊

この神学者は苛烈な生き方で私たちを圧倒するだけではない。すぐれた研究者として社会と人間に注ぐ透徹したまなざしは、今の社会と時代も射抜く。

エッセー「10 年後に」(『ボンヘッファー獄中書簡集』増補新版、所収) に出てくるナチ支配下の知識人の分類が本書で紹介されている。

たとえば「義務に従う者」。人道に反するような行為を権力者から迫られたとき『義務』は『確かな抜け道』になるという。「命令された義務を服務規律の名において遂行することこそ倫理的に確実な行為」と考えれば心がざわつかないですむからだ。

思いつく事例には今でもいくらでも挙げられる。ナチとの関係ではフランスで 1998 年にあった裁判。第 2 次大戦中の対独協力政権時代にユダヤ人の検挙に大きな役割を演じた高級官僚を有罪にする判決が出た。このとき被告は「私は上からの命令を忠実に履行しただけだ」と反論していた。日本でも思い浮かぶ例には事欠かない。政権のもくろむとおりに学校の設置を許可

したり、あったはずの文書をないといったり、上司への付度に力を傾けたり……。ボスの命令や意図に従うのは「服務規律」と考えれば、良心の呵責も棚上げできる。

＊

また、『服従』という本の中で触れられている「異境の人」という概念は、社会における知識人や言論人の役割の本質を考える上で大きな手がかりになる。

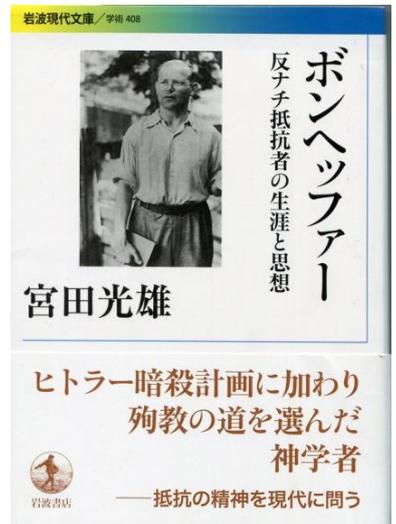
本書によると、ボンヘッファーは、当時の「ナチ的政治宗教とそれに適応しようとする大多数の民衆や教会の群れ」を暗示して、イエスに従う者は「その中に生きていながら、その外にいないなければならない」と主張したという。

この部分を読んで思い出す本がある。『聖職者の裏切り』という。フランスの思想家ジュリアン・バンダが 1927 年に著した。仏語では「聖職者」はインテリも指す。この場合は、もっと広く「言論人」と言い換えてもいいだろう。

第 1 次と第 2 次の両大戦間、フランスでも言論人の多くが人種とか階級への帰属意識やナショナリズムといった政治的な情念に突き動かされた論を主張していた。バンダはそれを真っ向から批判する。

「正義や理性のような永遠の価値を擁護するのが使命である者たち、知識人と呼ばれる者たちが、現実的な利益のためにその使命を裏切っている」。

パレスチナ出身の知識人で米コロンビア大学の教授だった批評家エドワード・サイドは 1993 年の講演で、この知識人観に深い共感を示している。サイドは「神も一掃された」今は、バンダのいうように「永遠の価値」を対峙させるのはむずかしいかもしれない。だが、



■宮田光雄・著『ボンヘッファー 反ナチ抵抗者の生涯と思想』(岩波現代文庫)、2019 年 7 月 17 日・発行

### 月報 11 月号 CONTENTS

#### クリスマス教会コンサートへのお誘い

- ・カンタータ《主の愛を讃えよ なれら》BWV 167……………p.2
- ・《クリスマス・オラトリオ》第 4 部 - 第 6 部……………p.3, 4

知識人は権威に問いを発し続けるべきだという。政府やその意を体したメディアが広げようとする価値を「相対化」する視点を突きつけることはできるではないか、と。

そして、サイドは知識人を「亡命者」や「部外者」になぞらえる。人々が帰属する社会をあたかも外から見るような視点を示すのが役割と考えるからだ。自分と読者が共有するアイデンティティーをあえて棚上げて語る役回りを引き受けろ、と迫る。

「亡命者」「部外者」は「異境の人」に重なる。著者によると、ボンヘッファーは「異境の人」に「この世に対して正面攻撃をするために」この世にとどまることを求めているのだと指摘する。しかも「われわれは——〈たとえ神がいなくとも〉——この世の中で生きなければならない」ともいう。バンダやサイドともみごとに響き合う。

\*

70年以上も前にナチとの闘いに命をかけた神学者。今の日本からは遠い存在であるはずの人物の行動と思想を描いた本書に切実なメッセージを感じるとすれば、私たちが暮らす日々が、ボンヘッファーが生きた時代や社会と見かけほどはかけ離れているわけではないことを、それは物語っているのかもしれない。〈了〉

=====

<執筆者・大野博人氏ご紹介> 1981年朝日新聞入社。ジャカルタ、パリ、ロンドンの特派員などを経て2007年ヨーロッパ総局長、2012年に論説主幹。現在は編集委員。

<主宰者より> 私が大野博人様に、新刊紹介（宮田光雄著『ボンヘッファー 反ナチ抵抗者の生涯と思想』）の、私たちの月報へのご寄稿をお伺いしたのは、宮田先生からのご寄贈本が届いた日（発行日・7月17日より数日前）の直後でした。月報でもたびたび触れているとおり、宮田先生からは、新刊書をいつも早々とお届けくださり、とりわけ今回は、ひどく危しげな世界の現状に際して、一日も早く、多くの人々に伝えたいという、先生の切実なお気持ちを感じましたので、一読後、思いきって、超多忙は承知の上、朝日新聞の論説で人心を深く動かしておられる大野様に、月報へのご寄稿を強くおねがいしてみたいです。

今回は、いつもよりぐっと視野を拡げて、活躍まっ唯中という方に、宮田先生のお訴えをさらにアピールしていただきたいと思い、当団の後援会員・団友で、かつてのご近所同士だった大野様に、当たってみることにしました。そもそもの出会いは、後に奥方となられる朗子さんとお二人そろって、今や伝説の(?)「カフェハウス・バッハ」のオープン(1975年)当初のご常連となられたことでした。お二人とも一橋大学の学生オケに属し(博人氏はVC、奥方はVa)、閉店後には我が家でトランプ遊びに興じたりもしたものです。もう大昔です。

まず、とても、とても、と足下に断られるのは覚悟していたのですが、ご著書の内容がよほど大野様までつき動かしたもので、さっそく一か月後には前向きのお返事をいただけました。熟読→ご寄稿までには、どれほどの集

中ご努力があったことか、想像を絶する思いですが、いまこの瞬間も、まさに東奔西走、社会の最々前線に働いておられる大野様に、あつく御礼申しあげます。当稿添付のメール(10月16日付)には、「私は今、欧州で取材中です。昨日はベルリンでした。今日はパリからこれを書いています。21日は帰国しますが、そのあと今度は数日、北京に出張が入っています」とありました。

私たちも、一読するだけにとどまらず、もっといちばん圧力に苦しむ世界中の層の人々に、何らかの具体的な働きかけを身をもって起こせるよう、その原動力がここに得られることを知って、ご寄稿へのお応えとしなければならぬと思います。月報の読者の方々に、私からも、さらにご期待をつけ加えさせていただきます。(大村恵美子)

---

## 東京バッハ合唱団 クリスマス教会コンサート へのお誘い

～ 時満ちて 人の子生まれぬ ～

- カンタータ《主の愛を讃えよ なれら》BWV 167
- 《クリスマス・オラトリオ》後半 BWV 248 IV-VI

<日時・会場>

12月14日(土)、二部公演

会場[A] 14:00 開演: 荻窪教会(日本キリスト教団)

会場[B] 18:30 開演: 三崎町教会(同上)

<出演>

ソプラノ(アリア): 光野孝子

テノール(アリアとエヴァンゲリスト): 鳥海 寮

管弦楽団: コレギウム・アルモニア・スプリオーレ・ジャパン(A R S)

オルガン: 新妻由加

合唱: 東京バッハ合唱団、指揮: 大村恵美子

<入場無料> (会場自由献金)

両会場とも定員に達し次第、入場を締め切らせていただきますので、あらかじめご了承ください。

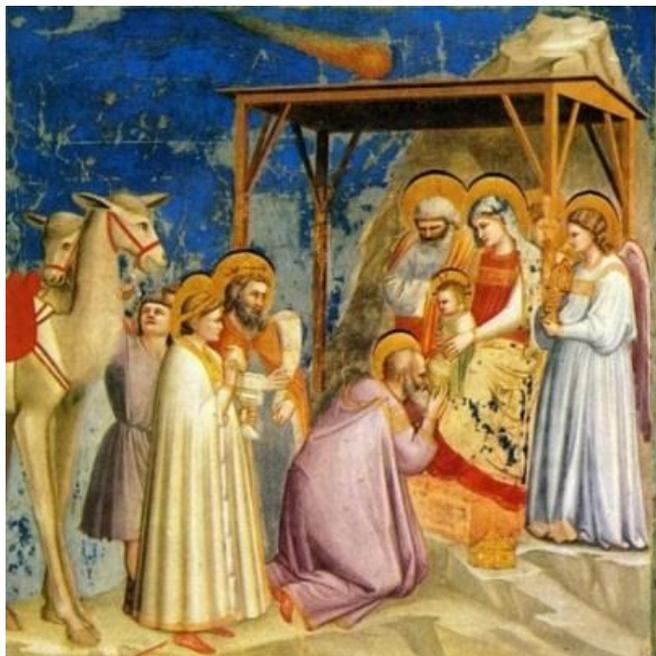
定員… [A] 先着100名、[B] 先着200名。

なお、とくにA会場(荻窪教会)は、混雑が予想されますので、入場のご予約をお勧めします。

<予約申込み>

お申し込みは、メール([office@bachchor-tokyo.jp](mailto:office@bachchor-tokyo.jp))、または電話(03-3290-5731)、FAX(03-3290-5732)で事務局あて。会場の別(A/B)をご指定の上、ご連絡ください。お名前・人数・連絡先(住所/電話番号)もお忘れなく。

去年のクリスマスシーズンには、「天使と羊飼いのクリスマス」と銘打って、《クリスマス・オラトリオ》の前半から第2部を中心に選曲し、年末用のカンタータBWV 28《頌むべきかな 年終り》を添えてプログラムを構成しましたが、今回はその降誕物語を完結させ



■「東方3博士の礼拝」(ジョット、1305頃)

る内容でお届けします。

前回同様、荻窪教会と三崎町教会、両教会のご協力をいただいていた二部公演です。開催にまでご尽力いただいた両教会のみなさまに心より御礼を申し上げます。

## ■カンタータ《主の愛を讃えよ なれら》

„Ihr Menschen, rühmet Gottes Liebe“ BWV 167

- ・用途：洗礼者ヨハネの祝日（6月24日）の礼拝用。
- ・初演：1723年6月24日（ライプツィヒ新作4曲目）
- ・書簡：イザヤ40；1-5（帰還の約束、荒野に道を備えよ）
- ・福音書：ルカ1；57-80（洗礼者ヨハネの誕生、ザカリヤの賛歌）
- ・歌詞：作者不詳。第5曲はグラーマンのコラール。
- ・編成：独唱SATB（今回AとBは団員斉唱）、合唱4声部、トランペット、オーボエ、オーボエダカッチャ、弦合奏、通奏低音（オルガン）

- 1) アリア (T)：主の愛を讃えよ なれら
- 2) レチタティーヴォ (A)：頌めよ イスラエルの主 神を
- 3) 二重唱 (S/A)：神のみ言葉 偽りあらず
- 4) レチタティーヴォ (B)：時満ちて 人の子生まれぬ
- 5) コラール：父・み子・み霊を 頌め讃えまつらん

さて、今回のステージのタイトルを、「時満ちて 人の子生まれぬ」としました。これはもちろん、クリスマス全体の主題なのですが、今回のプログラムでは、最初に演奏する「洗礼者ヨハネの祝日」用カンタータの第4曲（バス・レチタティーヴォ）の冒頭句の訳詞（上記下線）にも重なります。ここでの〈人の子〉は、言うまでもなく洗礼者ヨハネを指しますが、主キリストの先駆としてのヨハネの役割の本質を端的に示す訳詞として歌われます。

洗礼者ヨハネは、旧約聖書が「主の道を備える者」として預言し、新約の福音書では、イエス・キリスト

にちょうど半年、先んじて誕生しました。今日の日本のキリスト教会でも、誕生日とされる6月24日を、祝日や記念日としているところがあります（カトリックや聖公会、ルーテル教会など）。

「幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。主に先立って行き、その道を整え」と、父ザカリヤが賛歌を唱えています。作品中では、この「ザカリヤの賛歌」にみられる章句が随所にちりばめられていますので、お目通しいただくことをお勧めします。直前の「マリアの賛歌」（ルカ1；47-55）が、ラテン語の冒頭句 Magnificat から《マニフィカト》と呼ばれるのに対し、こちらは、冒頭の「頌め讃えよ (Benedictus)」から《ベネディクトゥス》と呼ばれます。いずれも古代以来の、もっとも古い讚美歌とされています。

## 《クリスマス・オラトリオ》第4部-第6部 „Weihnachts-Oratorium“ BWV 248 Teile IV-VI

- ・用途：[第4部] 新年、キリストの割礼と命名の祝日（毎年1月1日）用。[第5部] 新年後の初めの日曜日用。[第6部] 顕現日（毎年1月6日）用。
- ・初演：順に1735年1月1日、2日、6日（参考[第1部~3部] 1734年12月25日~27日）
- ・福音書：[第4部] ルカ2；21（幼子はイエスと名付けられた）。[第5部] マタイ2；1-6（占星術の学者たちがエルサレムに訪れる）。[第6部] マタイ2；7-12（学者たちはイエスを探し出し、礼拝する）
- ・歌詞：台本作者不詳（ヘンリーチ?）。福音書からの引用（上記）、数編のコラール。
- ・編成：独唱SATB（今回AとBは団員斉唱、第39曲のエコーは団員独唱）、合唱4声部、トランペット3本、オーボエ2本、オーボエダモーレ2本、ティンパニ（今回は太鼓・団員）、弦合奏、通奏低音（オルガン）

今年の12月14日は、左に述べたとおり《クリスマス・オラトリオ》後半から抜粋の形で、主に、クリスマス（キリスト降誕）に関する言い伝えの脈絡を辿ってご紹介しようということになりました。

## ■第4部《ささげん 頌め歌を》より „Fallt mit Danken, fallt mit Loben“

- 36) 合唱：ささげん 頌め歌を
- 37) 福音史家 (T)：八日満ちたれば
- 39) アリア (S/エコー)：わがイエスよ ながみ名は
- 42) コラール：イエス われを正し

キリスト教会では、元旦（1月1日）は「イエス・キリストの割礼と命名の祝日」と定められ、バッハのこの日の礼拝のための作品も、1735年元旦、ライプツィヒの聖トーマス教会で午前、聖ニコライ教会で午後

に初演されました。テノール独唱の福音書記者 (Evangelista、福音史家とも訳される) は、新約聖書に書かれている記事（上

述の箇所) の、筋を追って叙唱しますが、ここの始まりでは、幼子は天使の指示によって、イエスと名づけられること、それは旧約聖書イザヤ書の預言「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」の成就であり、インマヌエルの意味は「神が自分の民と共におられる」ということだと明かします。

## ■第5部《栄光を主に歌わん》より „Ehre sei dir, Gott, gesungen“

- 43) 合唱：栄光を主に歌わん
- 44) 福音史家 (T)：イエスはヘロデ王のとき
- 45) 合唱とレチタティーヴォ (A)：いずこ生まれし ユダヤの君は？ / 求めよ彼を わが胸の奥深く
- 46) コラール：暗き夜はいま み光に吞まれぬ
- 48) 福音史家 (T)：これを聞いて ヘロデは怖る
- 49) レチタティーヴォ (A)：いかで怖れん？
- 50) 福音史家 (T)：ヘロデは 民の祭司长 学者らを集めきたり
- 52) レチタティーヴォ (A)：主は統(す)べたもう
- 53) コラール：雅びの広間にも あらざるなれど

第5部の45)からは、ヘロデ王や東方の3博士ら(占星術の学者たち)が、ユダヤの王となる者が、星の導きに示される地で生まれるが、それはどこなのか？ と探し始めます。

## ■第6部《主よ 驕れるあだに》より „Herr, wenn die stolzen Feinde schnauben“

- 54) 合唱：主よ 驕(おご)れる敵(あだ)に
- 55) 福音史家 (T/B)：ヘロデ ひそかに 博士らを召し / 行きて 幼な子を訪ねよ
- 56) レチタティーヴォ (S)：偽りものよ 主に向かい
- 57) アリア (S)：ひとたび み手の動かば
- 58) 福音史家 (T)：博士ら 王のことばを聞いて行きぬ
- 59) コラール：なが傍(かた)えに立たん
- 60) 福音史家 (T)：博士ら夢にて み告げをうけ
- 63) レチタティーヴォ (S/A/T/B)：死の怖れは消え
- 64) コラール：あだは今しも 退けらる

第6部の55)で、ヘロデ王は、それがベツレヘムだと聞いて、そのみどりごを確定するよう博士たちに命じますが、夢でその命令を避けるようにと告げられたかれらは、ヘロデに報告することなく帰って行った、という話です。

ヘロデは、むきになって、同じ頃に生まれた男児たちを、片端から殺した(歴史上の記述はどこにもなく、史実の認証は残されていない)というあたりのことは、バッハのこの音楽でも直接には扱われていませんが、全体のフィナーレにあたる63)、64)では、イエスを殺すという企みは果たせず、〈あだは今しも 退けらる

/ 抗う者を 主は砕きぬ〉と歌って、ヘロデの邪念が頓挫した結果を表現します。

それでも、この《クリスマス・オラトリオ》の、最初に登場するコラール(第1部・第5曲)〈いかに迎えん いかに見(まみ)えん〉と、最後のコラール(第6部・第64=このオラトリオ全体の最終曲)〈あだは今しも 退けらる〉の両方の旋律が、受難のコラールとして最も有名な、ハンス・レオ・ハスラー(1601)原曲(《マタイ受難曲》の主題旋律)のものを採用したことで、バッハの意図は明らかで、神の子イエスの誕生は、十字架刑の死をもって終わる、人類の罪を贖うためのものだった、ということ、を訴えているわけです。

オラトリオの前半が、〈喜べや このよき日を〉と、トランペット3本、ティンパニ付きの、全くかけりのない大合唱に始まるのに対して、今回演奏する後半からフィナーレにかけては、同様にトランペット3本、ティンパニ付きではあっても、最後の歌詞は〈あだは今しも 退けらる / 抗う者を 主は砕きぬ〉とあって、〈あだ(仇・敵) = 抗う者〉は、いずれも人間なので、ヘロデ、ローマ兵ら、群衆、ピラト等々、寄ってたかってイエスを刑殺に追いやったのは、とても神に立ち向かえるような強い相手ではなかったのです。

さすがのバッハも、これでは、初めの全面的に陽気で混り気のない歓喜に始めたクリスマス音楽を、最後に至るまで、同様の沸き立つ喜びで結びこむことは出来なかった。むしろ、それによってこそ、最終コラール64)のメロディーに、典型的な受難コラールのふしを用いて、その必然性に思い至らせることに成功したのです。

東洋では、新年元日という、まっさらに新しくなって、しみ一つない真っ白をイメージさせるような気持ちりが浮かび上がり、除夜の鐘から初日の出の初詣ですが、新年の第1ページの行動を代表するようです。そんなこともあって、私にも、このバッハのオラトリオが、後半になると、やや俗っぽく、怒りや勝ち誇りに支配されるのを、何となく残念に感じられてくるのです。決してケチをつける気ではないのですけれども、前半に比べて、人間の暗愚さのほうに強く引きずられてしまうのを、抑えきれません。

皆様はいかががでしょうか？ よかった、よかった——と同時に、神の子の誕生の音楽に、人間たるわが存在の複雑さ・危うさに心波立つ時節として、年末・年始を迎えるのが、年ごとに変わらないでいるのです。

天使と羊飼いの視点に絞り込んだ、昨年(2022)の前半3部から、受難の旋律にのって人間の暗愚が底流する、今回の後半3部へと、独自の編集で《クリスマス・オラトリオ》を俯瞰しました。来年末には、この2年間の試みを経て、いよいよ完全編成版による《クリスマス・オラトリオ》前半3部全曲をお届けする予定です。これもお楽しみに。(大村恵美子)